

職員の意識や 職場風土を変えた 排泄ケアへの取り組み

和歌山県新宮市にある社会福祉法人黒潮園では、2010年から排泄ケアの見直しに取り組んできた。利用者のおむつ装着を前提とせず、腸内環境を整えるための下剤の中止や水分摂取の推進、運動の促進を行った結果、おむつ装着率を激減させただけでなく、職員の意識や経営改善にもつながったという。



◀ 岡理事長（左）と北村武巳介護主任

職員の経験則に依存しない 質の高いケアにシフト

社会福祉法人黒潮園は、1977年から特別養護老人ホーム黒潮園（定員100人）を、2014年から地域密着型特別養護老人ホームクレール高森（定員29人）を運営する和歌山県新宮市の法人だ。理学療法士として12年間病院に勤務した経験をもつ岡理事長が2010年に着任し、職員の経験則に依存した作業的介護から「医学的根拠に基づく質の高いケア」へのシフトを掲げて経営改革をスタート。この改革の軸となったのが排泄ケアだったと岡理事長は振り返る。

「着任当初に職員アンケートを実施したところ、介護職にとって夜勤の負担が大きいという声が多く挙がりました。特に、職員配置が手薄な深夜に、利用者の排泄物の漏れによるおむつ替えだけでなく着替え、リネンの交換まで必要とする現状がありました。数人ではなく、一晩に数十人もの利用者さんの対応に追われ、職員の労務負担となっていたのです」

岡理事長は、「排泄ケアの内容が施設ケアの専門性の尺度とも言える」と考え、現場の労務負担の改善には専門性の向上が不可欠であるという結論に行きついた。

下剤による強制排便により便性が整わず、水溶性の便となり漏れてしまう。ならば、便性を整えるために腸内環境を整えればよいのではないか。専門知識を共有する勉強会を開催し、排泄ケアの見直しを職員に提案した。

具体的には、

- ① 下剤を止めてみる
- ② 食物繊維の多い普通食に段階的に引き上げる

- ③ 個々の水分摂取量を記録して足りなければ引き上げる
- ④ 排便リズムを記録して、トイレ

での座位排便を支援する

- ⑤ 歩行などの運動を促進する

を行い、週1回のカンファレンスで経過を見ながら対応策を変えていくというものだ。医学的根拠に基づいた介護にシフトするための第一歩でもあった。

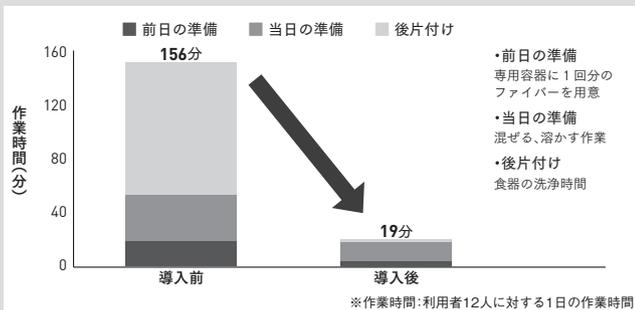
介護主任の北村武巳さんは、この提案を聞いた当時、「できるわけがないと思った」と振り返る。



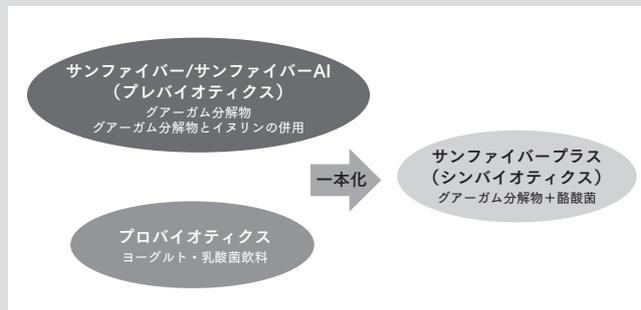
◀ 多職種で開催されるカンファレンスの様子

寝たきりの高齢者も多く、おむつを重ねても漏れるのが当たり前。排便がなければ、下剤を投与するしかないというのが、介護現場の共通認識だった。しかし、岡理事長の提案を実行してみた結果、予想に反して1カ月前後で利用者の排便状況に変化がみられるようになった。利用者の8〜9割がトイレで排便できるようになり、おむつを装着しなくてもよくなっていったのだ。運動を促進すること

図表2 「サンファイバープラス」導入による職員の作業時間の変化



図表1 「サンファイバー」「サンファイバーA1」から「サンファイバープラス」への切り替え



により、要介護度が下がるケースも出始め、利用者の健康状態が改善するとともに、介護職員のおむつ交換を主とする介護の精神的・身体的負担は軽減されていた。

高発酵性水溶性食物繊維 (グアーガム分解物) 導入が転機

残り1〜2割の利用者の排便状況も改善したいと試行錯誤するなか、太陽化学株式会社が発売販売している高発酵性水溶性食物繊維のグアーガム分解物「サンファイバー」「サンファイバーA1」を知り、試験的に導入を始めた。1日3回(15g)、飲み物やスープに混ぜて該当する利用者に提供したところ、早い人では数日で便性が整い始め、最終的に座位排便ができるようになった。

「軟便の方には『サンファイバー』を、硬い便の方には『サンファイバーA1』を使い分けると便性が整いやすいこともわかってきました」(北村さん)

排泄ケアがうまくいくようになると、業務効率化という次なる課題が見えてきた。同法人では、腸内の善玉菌のエサとなることで腸

内細菌を整える「サンファイバー」「サンファイバーA1」と一緒にヨーグルトや乳酸菌飲料を提供して排泄につなげていたが、2種類の使い分けや準備や片付けに職員の手がとられる。そんなとき、酪酸菌が配合された新商品「サンファイバープラス」が発売されたことを知り、北村さんはこの商品に統一できないかと考え始めた

(図表1)。試行した結果、乳酸菌飲料がなくても「サンファイバープラス」を1日1回使用すれば状態を維持できることがわかり、現在はほとんどの利用者が「サンファイバープラス」入りのお茶を1日1回飲むだけでスムーズな排泄を維持。職員の作業負担軽減にもつながった(図表2)。

排泄ケアへの取り組みが 職員の成功体験に

このような排泄ケアを通じて、排泄以外の利用者の状態にも変化が見られたと岡理事長は言う。

「寝たきりだった方が、座位排便ができるようになり、歩けるようになったケースが複数あります。また、腸は第2の脳と言われ、『脳

腸相関』という言葉もあります。

便が滞ると精神的に不安定になる高齢者は少なくなく、当施設でも、家族に怒ったり、他のご利用者様に八つ当たりする方が、排泄がコントロールされることで不穏を起こさなくなりました。腸内環境の改善がご利用者様のQOLを上げることもつながっていると自負しています」

法人内の雰囲気も変わり始めた。岡理事長は続ける。介護職員が根拠に基づいたカンファレンスを重ねることで、プロとしての意識が高まり、仕事に意欲的に取り組む姿勢が目立ち始めた。排泄ケアの見直しから始まった、作業的な介護から自立支援介護への転換により、職員間のチームワークが高まり、現場が明るくなったと言う。「今後は、敷地内におしゃれなカフェや職員寮をつくるなど、若者に、『介護II面白そう』だと思ってもらえるような企画を温めています」(岡理事長)

DATA

社会福祉法人黒潮園

和歌山県新宮市三輪崎2471-1
TEL 0735-22-5989
URL www.kuroshion.or.jp/